

『枕草子』

「細殿に便なき人なむ」段

竹村信治

(広島大学)

I 「細殿に、便なき人なむ、晝に傘さして出でける」といひ出でたるを、よく聞けば、わが上なりけり。『地下などいひても、目やすく、人にゆるさるばかりの人にあらざるを、あやしのことや』と思ふほどに、

II 上より、御文もて来て、「返り事、ただ今」と仰せられたり。『何事にか』とて見れば、大がさのかたをかきて、人は見えぬ。ただ手の限りをとらへさせて、下に、「山の端明けし朝より」と書かせ給へり。

III なほ、はかなきことにてもただめでたくのみおぼえさせ給ふに、恥づかしく、『心づきなきことはいかでか御覽ぜられじ』と思ふに、かかる虚言うそことの出で来る、苦しけれど、をかしくて、

IV 異紙ことに、雨をいみじう降らせて、下に、「ならぬ名の立ちにけるかな
さてや濡れ衣にはなり侍らむ」と啓したれば、右近の内侍などに語らせ給ひて、笑はせ給ひけり。

* 和泉古典叢書『枕草子』二二四段。以下『枕草子』の引用は、特にことわらない限り、本叢書による。ただし、右本文は諸注釈書を勘案して私に考訂した。

平成21年度の附属福山中・高等学校研究大会(11月20日)では、金尾茂樹氏の単元「『ことば』の力について考える」(中学校1年)、金子直樹氏の単元「『枕草子』を読む」古典における「批評」と「評価」(高校2年)の授業が公開された。いずれも、「新学習指導要領」に則った大会研究主題「思考力・判断力・表現力を育む教育課程の創造」クリティカルシンキングを柱とした「生きたる力」の育成」に基づく授業提案である。

金尾氏の授業は、鷲田清一「想像」のレッスン」を教材に、世界を分節し名づける「ことば」の力への視界を開き、「ことば」を対象化し批評する地点に学習者を誘おうとする狙いをもって構想されたもので、中等教育初年の「ことば」学びとしていかにもふさわしく思われた。

金子氏の授業は、副題にもあるように、古典にクリティカルシンキングの実例をうかがうもの。「雪のいと高う降りたるを」段(和泉古典叢書(底本三卷本系統、以下「和泉叢書」)・二八四段、「細殿に便なき人なむ」段(二三四段)の「構造」(前提「和歌や漢詩文の教養」)、「応答(状況に合わせた謎掛けと応答)」、「評価(満足感の表明)」の分析をもって『枕草子』の方法」を取り出していく。授業展開は、一方で『枕草子』読解テクニクの習得を狙い、他方で平安中期の実態的な「批評」「評価」の場との出会いを仕組み、加えて、そうした話題を通じてテキストに定子ならびに中関白家像をかたどっていく『枕草子』の表現位相にも、公開授業以前の『枕草子』類聚的章段、『大鏡』『栄花物語』中関白家関連記事の学習を想起、参照させることで迫ろうとしたもの(=「批評」「評価」、と拝見した)。

周到に練り上げられた公開授業は、学習者だけではなく観察者をも、単元をめぐる思索へと引き込んでいく。今年も「ことば」、『枕草子』について考える心地よい時間を過ごさせていたのだが、なかでも金子氏が取り上げた『枕草子』「細殿に便なき人なむ」段は以前から気になっていた章段であったので、授業中、授業後、またその後の数週間、折々にあれこれと考えた。本段は岩波・日本古典文学大系(底本三卷本系統、以下「旧大系」・二三八段)が「中宮の愛と才智を語る回想の記」と評しており、金子氏がそうされたように「雪のいと高う降りたるを」(通称「香炉峰の雪」「雪山」)段と一括して扱える章段である。以下、高等学校での「雪山」段学習の補助教材としてこれを用いる場合を想定し、章段解釈の私案を記して批評を仰ぎたい。

*

『枕草子』「細殿に便なき人なむ」段は、旧大系の評にもかかわらず、角川文庫『新版枕草子』(底本三卷本系統、二三四段)で石田穰二氏が「細部になお理解の至らぬうらみを残す」(現代語訳「付記」と述べるように、諸本間の本文異同も多く、読み方の難しい章段である。便宜上四段(I~IV)に区切り、諸注釈書間で解釈の分かれる点を取り上げながら読み進めることとしよう。

I 「細殿に、便なき人なむ、暁に傘さして出でける」といひ出でたるを、よく聞けば、わが上なりけり。『地下などいひても、目やすく、人にゆるさるばかりの人にあらざるを、あやしのこ
とや』と思ふほどに、

右の校訂(考訂)本文のうち、冒頭「細殿に」を和泉叢書は会話文に含めないが、これが「便なし」の理由を構成し、両者相俟って下文「地下などいひても」以下の思惟を導くと見て会話文に入れた。また、心内語を「あやしのことや」のみとする注釈書が多いけれども(日本古典文学全集(底本能因本系統、以下「旧全集」・二二五段)、日本古典評釈全注釈叢書(底本能因本系統、以下「全注釈」・二二五段)、新日本古典文学全集(底本三卷本系統、以下「新全集」・二二三段)、これも「地下などいひても」以下の伝聞(「あらざる」)が「あやしのことや」の判断に帰結するとみて、日本古典集成(底本三卷本系統、以下「集成」・二二一段)の判断にしたがった。

次に異文関係(傍線部)を見よう。ここでは三卷本系統本文(以下「三卷本」)を底本としたが、能因本系統本文(以下「能因本」)では傍線部「さして」が「ささせて」、「出でけると」、「出でけるを」、「ゆるさる」は「ゆるされぬ」とある。「さして」「ささせて」は、「国宝源氏物語絵巻」の蓬生帖源氏末摘花訪問図(徳川美術館蔵)や尾道・浄土寺蔵「源氏物語扇面散屏風」の同場面扇面図などから見て「ささせて」が時代慣習に近いのだろうが、次のⅡ段、中宮定子が遣わした絵(「大がさの形をかきて、人は見えず。ただ手の限りをとらへさせて」。なお「ただ手の限りをとらへさせて」は能因本で「手の限り傘をとらへさせて」との関連では「さして」がよい。「と」を」との異文関係は、その前を会話文とするか否かの違い。前者の方が風聞性がよく伝わる。

「ゆるさる」と「ゆるされぬ」との異文関係は能因本がわかりやすい。新日本古典文学大系(底本三卷本系統、以下「新大系」・二二一段)

は能因本による校訂を施している。和泉叢書は「緩さる」と表記して「あまく見られる」の訳を頭注に記している。いずれにしても、これらは「細殿に」「便なし」とされた「地下」(北村季吟『枕草子春曙抄』「地下とは昇殿せざる人をいふ也」、和泉叢書頭注「殿上を許されていない五位である」)を清女が肯定的に見ていたとして読む立場だが、その延長線上には、新全集のような、「人にゆるさるるばかり」を「泊まった人ではなく「言ひ出でたる」人について説明したもの」と見、「地下」とは言っても、その人の言うことを人がまともに受入れるといった程度の人でもないのに」との解も登場している。

さて、こうして冒頭Ⅰ段をひとまず読み通すことができるが、内容にはなお不審な点がいくつが残る。その一つは「よく聞けば、わが上なりけり」。これによれば、清女は非難がましい噂を前もって耳にしている、その折には自分のこととは思わなかったことになる。

問題はなぜ自分のことと思わなかったかである。これについては、
A 自分も男を泊めたがそれは誰もがしていることで見とがめられるようなことではない、と思っていたから

B 自分は男を泊めなかったから関係がない、と思っていたから
の二通りが考えられる。^(注2) 諸注は、明示しないが、心内語(「地下などいひても、目やすく、人にゆるさるるばかりの人にもあらざるを、あやしのことや」)での肯定的な評価を根拠にして、A説に立っているように見うけられる。しかし、そう解すると、その心内語の男性評が「あらざる」と伝聞で結ばれ、男と距離をおく形になっている点はやや不可解。これが不審の二点目だ。この点に注意をほらう旧新全集は「あらぬを」と言っしてしかるべきなのだが、わざとおぼろに「ない

というふう聞いて「と表現したものとす。だが、宮仕人をも訪れる男について「物食ふ」ことの是非までを問ひ（一八九段）「宮仕人のもとに來などする男の」、雨中に訪問する男の下心を見透かす（二七七段「成信の中將は」）ほどの清女が、通わせる男の評価を噂で承知する、あるいはおぼめかすなど、ちよつと考えにくい。このあたりが「細部になお理解の至らぬうらみを残す」ところなのだが、さらにⅢ段で見るように、彼女は「かかる虚言の出で來る」ことを「苦し」と感じているのであつて、この「虚言」言明との齟齬も説明しにくい所である。

これらの不審を一挙に解決してくれるのはB案である。男を泊めなかつたのだから当然、噂は当初、耳にとまらない。「よく聞けば」の情報には男の素性も含まれていたのであろう。縁のない自分への誤解はやがて解けようが、それなりの評判の彼、暁まで殿上を徘徊して「細殿に便なき人」と言い落とされるとは「あやしきことや」（奇妙なことで、お気の毒）、といつたところか。しかし誤解は解けないまま噂だけが定子のもとに届いてしまう。「かかる虚言の出でくる」ことを「苦し」と感じるのはその時である。

それにしても、こうした誤解を含む噂が出來したのはなぜだろう。これについては最後まで読んでから考えることにしよう。

Ⅱ 上より、御文もて來て、「返り事、ただ今」と仰せられたり。

「何事にか」とて見れば、大がさのかたをかきて、人は見えす。

ただ手の限りをとらへさせて、下に、

「*山の端明けし朝より」

と書かせ給へり。

「上」は、清女が今いる局（細殿）に対しての語とすれば、中宮御在所である（七七段「頭の中將のすずなる虚言を聞きて」、など）。Ⅲ段で、届いた書簡を見た清女が恐縮しているところ、返書を「啓す」としているところからも、それがふさわしい。ただ、『枕草子』全般の用法では、「上」で一条帝、その在所をいう場合も多い。また、帝と定子が文を捏造して藤三位繁子をからかつた「円融院の御果ての年」（二三三段）には、「（藤三位ハ）上もおはします御前にて、語り申し給ふ。宮（定子）ぞいとつれなく御覽じて」とある。章段末尾に帝と定子との取り次ぎ役内裏女房「右近の内侍」が登場するのも意味ありげである。金子元臣氏『枕草子評釈』（底本能因本系統、以下「金子評釈」・一九四段）は、

中宮は昨夜御上直のま、清涼殿にとまつてお出遊ばされた時である。細殿とは懸離れてゐるのに、今朝の話がもうあちらへ筒拔だ。これはお夜話の人と交代の為、細殿から出勤して往つた女房の宣伝と見たのは、僻目ではあるまい。

と推察して（注）。「上」に帝がいた可能性は残しておきたい。

「大がさ」は明治26年初版の鈴木弘恭『訂正／増補』枕草子春曙抄（青山堂）の増注に「和名抄ニ。簪。史記音義云。簪。俗云大等於保賀佐。筓有柄也」とあつて、諸注これに従ひ、和泉叢書は「かさ」の表記を「簪」で統一している。「かた」の表記には平仮名のほか「形」「絵」があるが、意味上の違いはない。「簪」図様の具体について、下玉利百合子氏『枕草子幻想 定子皇后』が「紙いっばいにひ

ろげられた大傘」と述べている。

傍線部の異文関係、「とて見れば」は能因本で「と思ひて見れば」、「ただ手の限りを」は先にも引いたとおり「手の限り傘を」とある。いずれも能因本の本文が読みやすいが、原態の如何は不明。「*山の端明けし朝より」の*印部分は能因本に「みかさ山」とある。描かれた「大がさのかた」を「みかさ山」の表意図様と判じ、それを本文化したもの。後に見るように、清女の返書「*ならぬ名の立ち（能因本「ふり」）にけるかな」でも、能因本は描かれた「雨」を*印に本文化している。絵画表象を文字化して説明した格好だが、そんな無粋な仕業に定子、清女が及ぶはずもなく、したがってこれらは後人賢しらの書き入れ。能因本の後代性がここに露顕しているともいう。^(注5)

ところで、こうして能因本の「みかさ山山の端明けし朝より」は後の清女返書の下句とともに後代書き入れ後の本文なのだが、これらの本文の影響は大きく、和泉叢書を除くすべての三卷本本文注釈書がそれに引きずられて、定子書簡を『拾遺集和歌集』雑賀・一一九一番の藤原義孝歌^(注6)、

あやしくも我が濡れ衣を着たるかな

みかさの山を人に借られて

を踏まえたものとしている。こうした読み方の奇妙さは、柄を捉えた「手」だけが見える「大かさ」絵に「山の端明けし朝より」と書き添えられた書簡表象と義孝歌との間にいかなる接点もないのを見れば明らかだ。『拾遺集』義孝歌の詞書は、

同じ少将通ひける所に、兵部卿致平の親王まかりて、少将の君

おはしたりと言はせ侍りけるを、後に聞き侍りて、かの親王の
もとに遣はしける

同歌『藤原義孝集』一八番の詞書は、^(注7)

左衛門督の命婦のもとに権中將となりて宮のおはしたりと
き、てやる

*傍書「右衛門ないしのもとに宮少将とイ」

*傍書「少イ」

だが、この詠歌事情にも『枕草子』本章段のここまでの叙述との相関関係はなく、したがって風聞を耳にした定子が義孝歌をふまえて問いかける理由も見当たらない。

それ故、三卷本の本文に則してその語りの文脈をうかがえば、書簡は、清女にかかわる噂（「細殿に、便なき人なむ、晝に傘さして出でける」）を絵と詞にかたどり、定子の風聞既聴取を伝えて事情説明をもとめたものと、ひとまずはすべきである。すなわち、『枕草子春曙抄』標注のごとく「彼笠さ、せて出たる朝より。さま／＼人のいふ事あるを仰せらるゝなるべし」、あるいは、これを承けた旧全集の、「あなたの所から男が傘をさして晝方に出た、その朝から」「いろいろとうわさをしているけれど、いったいどうしたのか、と中宮が作者にたずねられたもの」というのが表層義であつて、だからこそ清女は次のⅢ段に見るように「心づきなきことは、いかでか御覽せられじと思ふに、かかる虚言の出でくる、苦しけれど」と気を病むのである。

ただし、「山の端明けし朝より」が七五句で構成され絵をとまなっているからには、これはまぎれもなく「歌絵」（広義）である。王朝

時代の「歌絵」については、佐野みどり氏「風流 造形 物語 日

本美術の構造と様態」第二篇第一節第一章「歌と絵と物語と」に概観と事例が示されている。^(注8) 狭義には「古今集歌をはじめとする当時一般に親しまれ口ずさまれていた」歌に詠まれた情景を視覚化し、そこに

歌の心ばえ、情趣を表出させた形式の絵をいうが、広義の「絵が添えられた贈答歌」としての「歌絵」も少なからず行われたという。本章段も「判じ絵的遊戯の世界」と評して取り上げられているが、

挙げられた事例にこのと同様に歌の一部を絵で表したものはなく、むしろこれは有名な『源氏物語』浮舟帖、匂宮・浮舟交情場面の、「いとをかしげなる男女もるともに添ひ臥したる絵を描きたまひて、

「常にかくてあらばや」などのたまふも」などの親縁性を感じさせる。こうした日常的な「小絵」描きの世界と「歌絵」の世界が融合する地点で、本章段の「判じ絵的遊戯の世界」は成立している。

とまれ、こうして定子書簡は広義の「歌絵」である。「歌絵」に七五句が書き付けられているからには、期待されているのは長句の成形。さらに、事件出来の「暁」を言い換えた「山の端明けし朝」は、空所の初句に「山」にかかわる五音歌語を補填させるためのヒント。そこに「大がさ」絵。となると、空所に「三笠山」が補填されるのは自然の成り行きである。しかしこの時点では、「三笠山」は、見た

とおり、詠歌内容、詠歌事情からしてまだ『拾遺集』義孝歌だけを想起させるものではない。たとえば和泉叢書は『後撰和歌集』恋六・一〇二九〜一〇三〇番の、^(注9)

男のもとに、雨降る夜、傘をやりて呼びけれど、来ざりければ
よみ人しらず

さして来と思ひしものを

三笠山かひなく雨のもりにけるかな

返し

もる目のみあまた見ゆれば

三笠山知る知るかゞさしてゆくべき

のうち、返しの「もる（漏る／守る）目のみ」歌を定子がふまえた歌として提案している。詞書に見える「雨降る」「傘」の縁からして、これも空所補填語「三笠山」が想起させる歌でありうる。あるいは、『拾遺集』義孝歌の次には、

忍びたる人のもとに遣はしける

平 公誠

隠れ蓑隠れ笠をも得てしがな

来たりと人に知られざるべく

もあるが、これも「大がさ」絵↓「三笠山」↓「笠」の縁で想起される歌ではある。

表層義「あなたの所から男が傘をさして暁方に出た、その朝から、人がいるとうわさをしているけれど、いったいどうしたのか」の背後に浮かび上がる歌語「三笠山」、そこにいかなる深層義がこめられているのか。これも「細部になお理解の至らぬうらみを残す」点の一つなのだが、ここにこそ仕掛けられた「判じ絵的遊戯」の本意があったと見れば、定子は、空所に浮かび上がった「三笠山」から清女がどんな歌を選んで「返り事、ただ今」の下問（釈明要請）に応ずるのか、それを試していることになる。

義孝「あやしくも」歌は人に名を騙られて詠んだ歌。噂が根も葉もないものにすぎないのだとしたら、この歌をふまえて、「同僚女

房がお咎めを免れようとして私の名を出して……」、もしくは「見つけられた知らない男が私の名を出して……」、詞書まで憶えていれば「どなたか殿上人が地下人の名を騙って……」と、「濡れ衣」を訴えるだろう。それをどんな絵と言葉で返して来るだろうか。

事実、だとしたらどう返して来るかしら。『後撰集』「さして来と」歌の下旬「かひなく雨のもりにけるかな」などを使うなら潔くて無難だけれども。その場合は、私の手紙が「もる目のみ」歌をふまえて咎めたもの（和泉叢書・頭注訳「明るくなつてから、かさをさして目立つこと」となる。が、それはそれで私がきちんと宮中禁忌の侵犯を訓誡したことになって好都合。

「隠れ蓑」歌はちよつといただけでない。「かいま見の人、隠れ見の人、隠れ蓑取られたる心地して、あかずわびしければ」（二〇〇段）と男に同情するのはいいとしても、「大がさ」で失敗したから今度は「隠れ蓑隠れ笠をも得てしがな」、なんて。それはあまりに好色。まるで『源氏物語』の源典侍のよう。それに「隠れ蓑」のモチーフ原拠、龍樹菩薩の話（今昔物語集 巻四第24話、など）では、若き日の菩薩が后を犯すのだったわ。とんでもないこと。

Ⅲ なほ、はかなきことにてもただめでたくのみおぼえさせ給ふに、恥つかしく、『心づきなきことはいかでか御覽せられじ』と思ふに、かかる虚言の出で来る、苦しけれど、をかしくて、

本文異同、「をかしくて」が能因本でウ音便化しているほか、「出で来る、苦しけれど」が能因本で「出で来るは苦しければ」とある。

後者、両系統本の意味するところに大きな異なりはないが、諸注釈書は、三巻本を底本とする場合に、「苦しけれど」を次句「をかしくて」と続けて理解し（和泉叢書・新大系 本文「苦しけれどをかしくて」集成・傍訳「つらいのだが（お手紙の）結構さに」、能因本を底本とする場合は「をかしうて」のみを次のⅣ段「啓したれば」を修飾するものとしている（全注釈・通釈「出てくるのは困るが、（中宮さまのお手紙は）すばらしいので、別の紙に〜と（書いて）お返事を申し上げたところ」）。語句の修飾関係で今一つ諸注釈書間に揺れがあるのは「恥つかしく。ほとんどのものは「恥つかしく心づきなきこと」（旧全集・口語訳「自分にとって恥ずかしく、気に入らないようなことは）」とするが、旧新全集は頭注に「はづかしく」を上文につけて、「心づきなき事は」だけを「いかでか云々」にかけて解くこともできよう。」と記す。ここではこちらを採り、「そうした中宮に対して」を補って「心づきなき事は」以下を心内語と解した。

「はかなきことにても、ただめでたくのみおぼえさせ給ふに」は、「はかなきこと」を「はかなき言」と考訂する場合がある（集成・和泉叢書）。その場合の「言」は「お言葉」。「おぼえさせ給ふ」は金子評釈に、

中宮の御所作のすぐれてのみ覚え申さるゝにと也。通釈（竹村云、武藤元信「枕草紙通釈」有朋堂、明治44年）、詳解（同、松平静「枕草紙通釈」誠之堂、明治32〜33年）、新釈（同、永井一孝「校定枕草紙新釈」三星社敬文堂、大正8年）には、中宮が女房のしわざをめです

せ給ふ意に解きたれど、前の解の穩健なるに如かず。
（注1）とある。古くは解釈の分かれたところだったようだが、旧大系・頭

注が「此方がそう思う程のその人の状態にいう特殊の敬語表現」と文法的な説明を与え、現行注釈書はすべて金子「穩健」説。ただし、旧新全集・頭注には、

「させたまふ」は中宮に対する二重敬語（尊敬）。中宮が作者にとつて「めでたし」とのみ感じられあそばす。直訳すると不自然なので、口訳では「めでたくのみあそばせたまふとおぼゆ」のように言い替えた。

とあり、「言い替え」が必要なほど「不自然」な解釈であることも確かかなことのようにだ。明治・大正期の解に従いたい誘惑を断ち切つて、ここは「穩健」についておく。

さて、この段で問題になるのはもちろん、これまでも取り上げしてきた「かかる虚言」である。噂は事実なのか否か。注2に引いておいたように旧全集は、

a 訪れたのは「びんなき人」ではなく「人にゆるされぬばかりの人にもあらざんなる人」であつたことをいつたものか。

b その男が実際には泊まつて行かなかつたことをいうか。

の解を示している。他は全注釈が加藤盤斎「清少納言枕双紙抄」の、
c 忍び契るにはあらで、たゞせうそこなどいひ来り給を、忍び契やうに、人々の沙汰給へば、その断コトハリをいはん為、さるそらこと、いふ也。

季吟『枕草子春曙抄』傍注の、

d 便なき人かよはせしをはちて空事といへる、おもしろきにや。を引用するばかりで、この問題に触れていない。注解するまでもないことなのか、「細部になお理解の至らぬうらみを残す」箇所の一つ

で解を示しえないのか、a～dがいずれも苦しい深読みをしているところから見ても恐らくは後者だろうが、それらの延長線上には三田村雅子氏の次のような判断も出てくる。

清少納言は地下人との噂を「かかると言ひても、目やすく、人に許されぬ」と書いているが、「地下など言ひても、目やすく、人に許されぬ

ばかりの人にもあらざるを」とある所をみれば、事実としてそのような噂が無根であつたとは思われない。それを「それ言」と言いなし、笠……雨……濡れ衣という歌言葉の連鎖によつて、

事実無根と言ひおおせてしまふ詭弁（注12）の能力こそ、この章段が証明しようとするものであつたのだ。

「詭弁の能力」（三田村氏はこれを「企みや引つ掛けや嘘や誇張に満ちたソラゴトの「宮仕え生活」を見事に泳ぎ切るため」の能力とする。たしかに「宮仕え生活」はそのようなものだろうが）、里（注13）に下がつて「宮仕え生活」を回想する清女がこれを一体誰に、何のために「証明」しようとしたというのか。

こうした解説は、いずれも「地下など言ひても、目やすく、人に許されぬばかりの人にもあらざるを」をもとに、「細殿に、便なき人なむ、暁に傘さして出でける」の風聞は事実、「便なき人」は清女の恋人、と見なすところから出発している。それ故、「虚言」の言明はそれ自体が虚言（詭弁）ということになる。

小論は、先にも述べたように、「地下など言ひても、目やすく、人に許されぬばかりの人にもあらざるを」の伝聞表現にこだわつて、「便なき人」を彼女とは縁のない人物とする解に立つ。「虚言」を清女の言明どおりに受けとめる立場である。「虚言」であると言つてい

るものを、どうして「それこそが虚言」と断じなければならぬの
だろう。それほど清女のもとに地下人を通わせたいのだろうか。よ
し「虚言」が虚言だとしても、清女がそれを「虚言」として語って
いることが重要だろう。「虚言」として語るのは、「虚言」その
ものではなく「虚言」をめぐるエピソードを話題にしたいからであ
る。すなわち「虚言」風聞出来に端を発する中宮定子との「歌絵」
贈答の事実、その思い出こそが本章段の主話題なのだ。だからこそ
ここに、

○なほ、はかなきことにてもただめでたくのみおぼえさせ給ふに、
恥づかしく、

○「心づきなきことはいかでか御覽せられじ」と思ふに、
○かかる虚言の出で来る、苦しけれど、をかしくて、

の三条が語られるのである。そう考えると、回想する清女にとつ
て、実はすでに風聞の真偽は問題ではない。彼女が「細部になお理
解の至らぬうらみを残す」かたちで語っているのは、そのせいであ
らう。

IV 異紙に、雨をいみじう降らせて、下に、

「*ならぬ名の立ちにけるかな

さてや濡れ衣にはなり侍らむ」

と啓したれば、右近の内侍などに語らせ給ひて、笑はせ給ひけ
り。

能因本で、清女返信の詞が*箇所¹に絵画表象「雨」を書き入れた

「雨ならぬ名のふりにけるかな」となっていることは先に述べた。後
人の賢しらである。ここでは図様説明「雨をいみじう降らせて」に
合わせて「立ち」を「ふり」にする改変も行われている。この賢し
ら人は清女返書の本意が「濡れ衣」の言明にだけあると見たのであ
らう。そこで、歌句（下句）に「雨」を明示し「立ち」を「ふり」に
書き換え、これに続く三卷本文「さてや濡れ衣にはなり侍らむ」
（そうしてこのまま「濡れ衣」を着るといふことになるのでございませうか）
を「雨」に降られ「名」の言いふるされた結果たる「さては濡れ衣
には侍らむ」（旧全集・口語訳「それだから、濡れ衣なのでございませう」、
全注釈・通釈「これはまあ濡れ衣でございませう」）に改変して「濡れ
衣」状態を強調、もつて定子書簡の表層義（あなたの所から男が傘を
さして暁方に出た、その朝から、人がいろいろとうわさをしているけれど、
いったいどうしたのか）への釈明返書たる趣旨を闡明にしたわけであ
る。「濡れ衣」の強調にむけたこれらの改変は、定子・清女の往復書
簡を義孝歌に媒介された対話とみなすところから出たものだが、書
き入れ、書き換えによる説明過多がかえって義孝歌の影を薄めてい
て、見られるとおり、能因本の清女返書は歌を知らなくても読める
ものとなっている。もちろんそれは本来の姿ではない。

では本来の清女の返書の姿を伝えたい三卷本の本文では
どのような対話が成立しているのだろうか。これについて、集成・
頭注は、

中宮も義孝の歌の「濡衣」という点で、清少納言の立場に理解
を示していられたし、清少納言も、中宮の寓意を悟ったことを
報告している。二人の以心伝的な主従の信頼関係は、早くも

築かれつつあった。

とする。近世以来の能因本による『枕草子』享受の余波として、定子・清女の往復書簡を義孝歌に媒介された対話とみなしているのがわかる。それは他の注釈書でも同じだ。しかし、指摘しておいたように、定子書簡は「三笠山」の歌語を浮上させてこれを含むいくつかの歌を想起させるものではあっても、義孝歌だけを呼び出すものではない。また、説かれるように、風聞を聞いた直後の中宮に「清少納言の立場」への「理解」があつて、歌語「三笠山」のみをもつて義孝歌だけが共起する「以心伝心」が見込まれ、首尾よく「濡れ衣」との予見が伝達されて「濡れ衣」との応答が返されたのですれば、そこでは「信頼関係」がすでに強く形成されているのであつて、このやりとりは「築かれつつ」ある関係ではなく、築かれた関係を確認した出来事ということになる。「嘘よね」「はい、嘘です」、そんな対話を『枕草子』に見出だすことは難しいように思うが、いかがだろうか。

繰り返して言うが、定子は義孝歌だけを念頭において歌語「三笠山」を浮上させる書簡を送つたのではない。歌語「三笠山」を「山の端」と絵によつて立ち上げ、この歌語もしくはこれに縁ある語を含むいかなる歌を用いて事情説明要請の問いかけに応じてくるか、それを「判じ絵的遊戯」の本旨としたのである。清女はこれを承けて「三笠山」にかかわる歌を想起し、それらを使いながら詞と絵とで何通りかの回答を寄せる。「以心伝心」は、問いの主旨にかかわる「判じ絵」了解において、まずは成立したのである。

清女の回答——詞「ならぬ名の立ちにけるかな」。「三笠山」から

想起してここに踏まえられたのは、『後撰集』よみ人しらず歌（さして来と思ひしものを三笠山かひなく雨のもりにけるかな）だろう。確かに男は傘をさして帰りました。「もる目のみあまた見ゆれば三笠山知る知るいかゞさしてゆくべき」（物見高い女房達がいっぱいいるのに、それを知りながらどうして人目につく「大がさ」をさして行ってよからう、仰るとおり、不用意でした。「雨降る夜」というので帰る男に「傘」を貸したのです（遣りて）。その貸した傘をさして再び来てくれることもあれば（さして来）と思つたのが間違ひのもと。「かひなく雨のものにけるかな」ならぬ「かひなく浮き名の立ちにけるかな」、男の再訪がかう前に噂になつてしまいました。これは、定子「三笠山」下間に「もる目のみ」歌の想起が想定されているとみて、その贈歌をふまえつつ応じたもの。男の来訪、傘をさしての退出を肯定する、少々色めかしい回答である。

ところで、この「ならぬ名の立ちにけるかな」は、新全集・口語訳にあるように「雨ではなくて、浮名が立ってしまいました」の意だが、その頭注にいう「雨も降らぬのに笠をさして出ていった、という浮名が立ってしまいました」ではなく、絵で「いみじう降らせ」た「雨」についてそれを「立」と表現することで、「夕立ならぬ、浮名が立ってしまいました」と述べたものである。同じ絵画表象の文字化でも能因本のそれ（ふり）のような再説になっていないところがミソだが、さらに、「雨」が夕立たとするところで、自分の所に来た男も「大がさ」をさして帰つたが、それは夕立のころ、といった事情説明となつてることが重要だろう。先に引いた加藤盤斎「清少納言枕双紙抄」の解（c）のうち、「忍び契るにはあらで、たゞ消

息などいひ来り給を」は、その夕刻来訪の男として相応しいかもしれない。また、そうなれば冒頭の心内語（『地下などいひても、目やすく、人にゆるさるばかりの人にあらざるを、あやしのことや』）は消息の使者に立つた地下人についてのこととなり、清女が素性をよく知らず伝聞として語っている点とも符合するわけである（その場合、夕刻の「消息」は雨をとぶらう手紙となり、そうした振舞いに及ぶ「地上人」ならぬ高貴の恋人の存在を、清女が暗にほめかしていることにもなる）。つまり、こうして「ならぬ名の立ちにけるかな」は、『後撰集』歌で噂の一部を色めかしく肯定しつつ、その男はしかし私の所から夕方に帰った使者だったと釈明する回答だったということになる。そこには、その男が暁方に細殿を出たとすると、その後、他の女房のもとを訪れたのかしら。しかも私の貸した傘をさして帰るなんて。まったく仰るとおり「もる目のみあまた見ゆれば三笠山知る知るいかゞさしてゆくべき」と言いたいですねと、自ら想定した定子所感に同調しつつ、他人事として、男あるいはこれを通じている同僚女房を非難する声も響いている。

清女の回答——絵。下玉利氏はここでも「用意した料紙いっぱい盛大に雨を降らせ」た絵を想定している。（注15）絵に「いみじう降らせ」た「雨」は、今述べたように夕立である。傘を描かないのは「傘がない」との主張だろう。傘は定子書簡の絵にあったように男がさして帰ったのだ。夕方、夕立のなか、男（消息の使者）が清女の傘を借りて帰った後も、「雨」は「一晩中」「いみじう降」り続いた。これが絵の含意。

つまりこの絵は、定子書簡中の絵「大がさのかたをかきて、人は

見えず。ただ手の限りをとらへさせて」に対して、そののち手元に傘もないまま「雨」は「いみじう降」り続いたと描いて応答したものが、これが定子下問（歌語「三笠山」またはその縁の語を含んだ歌をふまえること）への回答でもあるからには、踏まえられているのは、いうまでもなく義孝歌下句（みかさの山を人に借られて）である。義孝歌は、この清女の「雨をいみじう降らせ」た絵の登場をまつて（定子絵「大がさ」「手」と「大がさ」なき「雨」の清女絵との間で歌語「三笠山」に媒介されて）浮上するのであって、それ以外ではない。そして清女は、定子書簡の詞の表層義（山の端明けし朝より）に「応ずる事実承認（名の立ちにけるかな）」を経て、その「名」すなわち噂が無実であることを義孝歌をなぞるようにして言明する。義孝歌では「みかさの山を人に借られて」その結果、「あやしくも我が濡れ衣を着たるかな」となりました。となると、私も降り続く雨の中「さてや濡れ衣にはなり侍らむ」（そうしてこのまま「濡れ衣」を着るということになるのでございましょうか）（注16）これは定子「三笠山」下問に「あやしくも」

歌の想起も想定されられていると見、それをふまえて応じたもの。I段心内語にあった「あやしのことや」の不審を義孝歌初句に重ね、当惑の現況を率直に伝えた回答ではある。そこには、嫌疑を晴らすための助力をねがう思いとともに、定子の予想したとおり、義孝歌の詞書をふまえて「あるいはどなたかの殿上人が、使者として出入りしている地下人の名を騙って私の局をお訪ねになったのかも知れません。私は不在でしたが、それを耳にした誰かが雨の中お帰りになるその方を地下人と見なしたのでしょうか」とのニュアンスも込められたかもしれない。となると、これは彼女の自意識にふれる回答

ということにもなる。

さて、こうして清女は「三笠山」の歌語を含む二首の歌を選定し、それぞれを踏まえた絵と詞で回答したとおぼしい。「拾遺集」の「隠れ蓑」歌は選ばれていない。二種の回答はいずれも無実に戻着するが、色めかしさと素直さに同僚女房への非難、自意識をからませたものとなっていて、広義「歌絵」のメディア性を最大限に活用している点とあわせ、定子の仕掛けた「判じ絵的遊戯」を十分に展開させたものと評しうる。仕掛けた定子の予想に則してそれ以上の遊戯を演じているところも、定子を喜ばせたであろう。末尾「右近の内侍などに語らせ給ひて、笑はせ給ひけり。」はそれを確認させる語りの「右近の内侍」(六・八二・八三・九六段にも登場)の名が出るのは定子の誇らしげな表情を伝えるためだろうが、II段の「上」に一条帝が含まれるとすれば、その表情は帝にも向けられていたことになる。

*

本章段に語られる出来事が何時のことかは定かではない。下玉利氏は「右近内侍」の登場を考慮すると、職時代以降の「晩年」とするが、「細殿」を内裏登花殿西庇のそれとする通説にしたがう集成は頭注で、

○中宮が常の内裏におわして、清少納言が細殿に局住みしていた

長雨の季節といえ、正暦五年(九九四)夏秋・長徳元年(九九

五)夏となる。「細殿に」注

○清少納言は、めつたに自分の歌や書をお目にはかけないように用心していたのだが、中宮の機智諧謔に釣られて手紙を書くこととなった。やはり新参意識の抜けやらぬ正暦五年頃のこと

あろう。「恥づかしく心づきな言はし」注

とする。正暦五年は前年冬に初出仕した清女二十九歳の頃。定子は十九歳である。「宮にはじめてまいりたる頃」(二七九段)などと読み合わせれば、「新参意識」は「なほ、はかなきことにてもただめでたくのみおぼえさせ給ふに」にもよく現れている。「三尺の几帳」「扇」「袖」だけが頼りの彼女は、定子の容姿に「絵にかきたるをこそ、かかることは見しに、うつつにはまだ知らぬを、夢の心地ぞする」。「御几帳のほころび」から見た伊周に物語の男主人公を重ね、猿楽言で戯れる道隆を「変化の者、天人などの下り来たるにや」と疑う。まさに「めでたくのみあらせたまふとおぼゆ」る毎日であったのだろう。しかしそこはまた、「何某がとある事など、殿上人の上など」が話題になり、女房たちの「企みや引つ掛けや嘘や誇張に満ちた」世界でもある。「上」ではクシヤミを恐れ「晝にはとく下りなんと急がる」清女は、「下」で「今日はなほ参れ」のお召しにとまどっていて「この局の主(同室古参女房)に「見苦し」と叱責される清女でもある。こうした新参者は何かと話題になりやすい。とりわけ彼女は亡き元輔の娘。一子則長をもうけた修理亮則光との関係は殿上で「妹、兄人」と呼称されるほどに薄くなり(七七段。七九段によれば出仕四年目の長徳三年ごろに離別、今はいわばほほフリー。「あまた」の「もる目」は彼女にこそ向けられていて、その視界に「便なき人」が紛れ込んだということであろう。となれば、「細殿に、便なき人なむ、晝に傘さして出でける」の流言はその過敏な「もる目」の仕業。そこでは当然誤解も派生し、針小棒大、噂が噂を呼んでやがては「すずるなる虚言」(七七段)が一人歩きしていくことになる。

あるいはこの事件、同じころに実は定子が帝と共謀して仕組んだことかも知れない。両者の共謀は、I段の「上」の解釈にかかわって紹介した一三三段「円融院の御果ての年」にも見える。院の一周忌が果てて「皆人御服ぬぎ」の頃、帝の乳母だった藤三位繁子に法師風の手で捏造した文（これをだに形見と思ふに都には葉がへやしつる

椎柴の袖）を送ってその反応を試した、というのがそれだが、これは清女出仕前の正暦三年（九九二）、定子十七歳、一条帝十三歳の時のこと。兩人に前科はあったわけである。あらかじめ清女をめぐる「細殿に、便なき人なむ、暁に傘さして出でける」の噂を流しておいて事情説明要請の「歌絵」を送り、その反応を見る（右近の内侍も一枚囁んでいたかも知れない）。そうであれば、藤三位は手紙の主を「仁和寺の僧正」「藤大納言」「好き好きしき心ある上達部、僧綱など誰かはある。それにや、かれにや」と数え上げ、結果、彼女の男性関係（あるいは関心のある男達）を自ら暴露した格好になり、それがまた定子と帝の狙いだったわけだが、同様の企画が新参フリーの清女にも向けられたと言ふことになる。その場合、書簡が浮上させる歌語「三笠山」は近衛府の誰某に目星をつけておいたことだったかも知れない。

いずれにしても、清少納言はそれらの好奇の目や諧謔の策謀を深長な振る舞いでかわし、仕掛けられた「判じ絵の遊戯」にも巧妙な機智で応じて定子の信頼を手にしていく。それは見てきたとおりだが、興味深いのは、これを回想しつつ書き進めている彼女の胸に去来したことの中身である。初宮仕えの頃に感じた周囲からの身を刺すような眼差し、夜の細殿の気配、物音、定子の小悪魔的な仕草、

言動、とりすました表情、誇らしげな笑み、声……。そうしたことは確かにありそうだが、三巻本で本章段に続く数段は、また別に去来した思いをうかがわせている。

次段、「三条の宮におはしますころ」で始まる二二五段は、能因本でも同様の並びになっている。三条宮（平生昌邸）は定子最晩年、長保元年（九九九）八月から同三年（一〇〇二）二月崩御の間の御在所。和泉叢書・頭注に「底本勘物に「二年五月」とする」とあって、諸注も本章段の出来事を長保二年五月五日のこととする。この年は、二月、道長が長女彰子を中宮に立てて定子を皇后とした年でもある。そうすると、同じく五月頃の話題である二二四・二二五段の排列は、清女出仕の初期と末期、中関白家の最盛期と没落後の話題が対照されていることになる。

語られているのは、献上品の初熟麦を「青き薄様」を敷いた硯の蓋にのせ、「ませ越しに麦はむ駒のはつはつに及ばぬ恋もわれはするかな」（古今和歌六帖・二）の上句を用いて「これ、籬越しにさぶらふ」（集成・頭注「馬が柵越しの麦をやつとの思いで喰むように、この青稜子をわずかも召し上がらなければ身体が保ちませんよ。」）の言葉とともに差し上げた清女に、定子が「この紙の端をひき破らせたまひて」、「みな人の花や蝶やといそぐ日もわが心をば君ぞ知りける」と書いて返した、との出来事。集成は評言で定子歌に込められた思いを次のように読み解いている。

皇后はその（竹村云、「ませ越しに」歌）下の句を踏まえ、天皇のお側を離れて、恋しさに身も焦がれて、柵越しに麦を喰もうと足掻く馬にも等しい自分の心境を、よく理解してくれたと感謝

された。(…中略…) 中宮彰子周辺は節供の行事に賑わっているのに対し、三条宮の皇后定子の身边は、身内の人たちだけが集まって、寂寥の感が強かった。

この定子に二二四段のような「笑ひ」はない。

つづく二二六段は定子の「御乳母の大輔の命婦」日向国下向の折の話題で、下賜の扇(その両面に描かれた絵は「日いつららかにさしたる田舎の館など多く」と「京のさるべき所にて、雨いみじう降りたる」)に定子自筆の「あかねさす日に向ひても思ひ出でよ都は晴れぬながめすらんと」歌が書かれていたという。清少納言は末尾に「いみじうあはれなり。さる君を見置きたてまつりてこそ、え行くまじけれ。」との寸評を記している。集成は評言に「前段に続き、御乳母さえ離れてゆく皇后の淋しい心境を回想する。」と記し、「いみじうあはれなり」の頭注に「清少納言が、皇后定子を描写して、「あはれ」という評語を、しかも悲哀感として用いた唯一の例。」と述べる。『春曙抄』標注によれば「道隆公隠れ玉ひ。伊周公左遷などの比。」の出来事である。

この二二六段は、能因本で九九段(旧全集)に見える。その前段九八段(和泉叢書・九〇段)は、殿上人の視線を憚り琵琶を立てて姿を隠した定子の容姿のめでたさに、清女が「琵琶行」の一節を引いて感歎の声をもらした話題。上臈女房がその旨を伝えると、定子は「笑はせ給ひて」これもまた「琵琶行」の字句をふまえて応じたという。旧全集・枕草子年表は正暦五年のこととし、集成は「清少納言が漸く新参意識から抜け出した長徳元年秋のことか」とする。長徳元年(九九五)四月十日の道隆薨去以前がふさわしかろうが、いずれにして

も、能因本でも前後章段の間に定子の「笑ひ」の有無が対照されているのがわかる。

二二七段「清水に」(旧全集・二八一段。前田家本、存)は清水寺参籠中の清少納言に定子が、

山近き入相の鐘の声ごとに恋ふる心の数は知るらんものを。こよなの長居や。

と「唐の紙の赤みたるに、草にて」書いた文を遣わしたとの話題。

清女は返事を「紫なる蓮の花びらに書きて」差し上げたという。集成の評言は「年長の清少納言を常に高所から導き、自愛の目で見守ってこられた皇后が、今やその友情にすぎる気弱なご様子を回想。」

さて、こうして二二四段につづく章段をみてみると、それらがいずれも定子の文にかかわる話題であることに気づく。二二四段の「歌絵」、二二五段の「青き薄様」の破れに書かれた返書、二二六段の扇面「歌絵」、二二七段の赤みたる「唐の紙」の草書文、二二八段の大輔命婦に下賜された扇は別としても、その他はおそらく今、書さつある清女の手元にあるはずだ。回想はそれらの物が惹起する場面、情景、心情の記憶として書き留められているのだらう。そしてその連鎖は、自ずから清女出仕の初期と末期、その間の定子の変貌をめぐる感慨を呼び起こす。二二五段の評言に「皇后晩年の悲運についての回想」と記す集成は、類聚的章段たる二二八段「駅は」章段(旧全集・二二三段。前田家本・堺本、存)について、「駅の種類という形をとってはいるが、実は第二百二十二段(竹村云、和泉叢書・二二五段)に始まった悲哀の文章の結末をなす、痛歎の文章である。」と述べる。

駅は、梨原。望月の駅。山の駅は、あはれなりしことを聞きおきたりしに、またもあはれなることのありしかば、なほとり集めてあはれなり。

清女が聞いていた「あはれなりしこと」は「本朝法華験記」巻下3や『今昔物語集』巻一四第一七話、『元亨釋書』第一九に語られる毒蛇転生譚（集成説）、あるいは『和歌童蒙抄』巻六や了悟「光源氏物語本事」に所引の『山駅記』が伝える琴譚（角川文庫説）ともいうが不明。問題は「またもあはれなることのありしかば」で、これは長徳二年四月の定子の兄伊周の大宰府左遷（病のため途中の播磨国に留め置かれた。集成は「山の駅」をこの地の野磨駅とする）にかかわるとい^{〔注16〕}う。

「痛歎の文章」との評はこれをさすが、抑制されていた「断絶と喪失の深い情動」の溢出にかかわる助動詞「き^{〔注19〕}」の使用も、そうした理解を促していよう。とすれば、二三四段からの物（文）を介した記憶想起の連鎖は、中関白家の最盛期から没落後へと次第に傾斜していったことになる。

定子の筆の跡は華やかな往時の「笑ひ」の表情を眼前に立ち上げつつ、自ずから晩年の悲嘆の面影をも呼び起こす。そしてやがては中関白家の現在へと清女を引き戻していく。『枕草子』を書き進める清少納言が経験している出来事とはそのようなことだが、このエクリチュールの傾斜は『枕草子』の言述のすがたをよく伝えている。^{〔注20〕}

*

以上、いささかの妄想もまじえて「細殿に便なき人なむ」章段の読解を試みた。これを教室でどう扱うかの問題は私の領分ではないので言及をひかえたい。ただし、ここで試みた分析は、

I 段 II 「あらざるを」の「なり」（伝聞の助動詞）

II 段 II 「暁」の言い換え「山の端明けし朝より」

III 段 II 「虚言」言明^{〔注21〕}

IV 段 II 「三笠山」関連歌二首と清女「歌絵」

II 「さてやゝなり侍らむ」の係り結び表現をそれぞれの核にしたもので、これらはいずれも高等学校の古文学習範囲にあるものである。とすれば、二三四段（雪山）章段で金子直樹氏授業提案にあった、

- 前提（和歌や漢詩文の教養）
- 応答（状況に合わせた謎掛けと応答）
- 評価（満足感の表明）

の基本構造を確認し、これを、

* 状況

* 謎掛け—前提としての和歌・漢詩文等の教養

* 応答—前提としての和歌・漢詩文等の教養

* 評価

と整理したあと、その応用問題として扱うのはどうだろう。「雪山」段は「前提」が一つでそれが共有された場合。一方、二三四段は「前提」の「和歌や漢詩文」が複数ある場合。複数を前提とする「謎掛け」は、品定め^{〔注22〕}の企図をふくむ。これに応ずる「応答」では、複数の前提から一つないはいくつかが選ばれ、その選択と運用に機智が仕込まれる。それは「状況」に合わせつつ行われるものでありながら、新たな「状況」を創り出すものでもありうる。噂による

「禁忌侵犯の嫌疑」状況から、噂否定の機智の返書による「笑ひ（定子の満足と誇り）」「雪山」章段の「この宮の人にはさべきなめり」の状況へ。ここでは、「評価」は、前提が一つの場合（出題者優位の「謎解き」）の「満足感」ではなく、拮抗する知と知がせめぎ合い、評価される者が評価する者を超えて応答していく、そこに出来る「満足感」として表明される。「判じ絵的遊戯の世界」ではそのような事態も起こりうるわけだが、本章段の学習をとおしてそうした事態が生起している古典世界の知の現場に引き合わせるというのも、古典との出会わせ方としてあってよいと思うがいかがだろうか。

こうした形の古典世界との出会いは、それ自体、読解の間のテキストと読み手との知のせめぎ合いを生み、知的興味（触れる）「知る」↓「楽しむ」↓「親しむ」^{（注22）}をもたらしことになる。すでにお気づきのとおり、小論の読解は故稲賀敬二先生の流儀を真似たもので、真似損ないをもともせず果敢に挑むのは、講筵に列して味わった知的興味が三十数年経つても忘れられないからである。したがって、古典世界の知の現場に引き合わせるといった古典との出会わせ方の有効性は自らに照らして確認済なのだが（もちろん教える側に先生レベルの知識と才知と技量があつてのこと、ただし、この「知の現場」探訪は物語内容（語られた出来事）にかかわることであつて物語行為の現場、つまりは出来事を語る主体のエクリチュールの現場には、いまだたどりに着いていない。小論は後半でそこへの踏み込みを試みたが、こうしたエクリチュールの現場との引き合わせも、物語内容を遠い昔のお話にしないためには必要だろう。そして、その現場の様態を読み手の「いま・ここ・わたし」において価値づけ（文章の内容と自分

の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと」『小學校学習指導要領』第2章第1節国語第2「第1学年及び第2学年」2(C)1オ、そう価値づける自己を対象化し相対化していくこと。求められている「熟考・評価」「批評」はそこが要所と思うが、これについては別の場でも述べたので再説しない。^{（注23）}

注

1 以下、『枕草子』の章段番号は和泉古典叢書本による。

2 旧全集はⅢ段中の「そら言（虚言）」への頭注に、「訪れたのは「びんなき人」ではなく「人にゆるされぬばかりの人にもあらざんなる人」であつたことをいつたものか。またはその男が実際には泊まつて行かなかつたことをいうか。」と記す。後者の判断はここでB案と重なるが、小論が「その男」を清女に通う者と見ない点、異なる。なお、新全集での「そら言」頭注には「暁に：」のうわさ。」とだけある。

3 金子元臣氏『枕草子評釈』一九四段評（明治書院、大正13年。

昭和15年増訂26版）、八八七頁。

4 下玉利百合子氏『枕草子幻想 定子皇后』（思文閣、出版、昭和52年）、一一二頁。

5 全注釈、評、参照。田中重太郎氏『枕冊子研究』（古典文庫、昭和27年）・『枕冊子本文の研究』（初音書房、昭和35年）。ただし、後に見るように、平安朝の「歌絵」は歌を絵画化したものであり、結果的に絵画表象は歌で言語化される形になる。賢しらはこれに依拠したものであろう。

- 6 『拾遺和歌集』の引用は新日本古典文学大系本。
- 7 田坂憲一氏・田坂順子氏『藤原義孝集 本文・索引と研究』(和泉書院、昭和62年)。引用は「類本系統。二類本系統では「衛門内侍のもとにこの少将となりのりてみやのおはしたりとき、ていひやる」(「内侍」に傍書「命婦とも」)。なお、「あやしくも」歌は『藤原義孝集』一類本で第二句「われまたきぬを」(「れまた」に傍書「かぬれ」とある。
- 8 佐野みどり氏「風流 造形 物語—日本美術の構造と様態」(スカイドア、平成9年)。当該論文初出は『名宝日本の美術一〇巻 源氏物語絵巻』(小学館、昭和56年)。
- 9 『後撰和歌集』の引用は新日本古典文学大系本。
- 10 能因本系統本を底本とする旧全集は、「苦しければ」を「苦しけれど」と校訂した上で、頭注に「底本原本のまま、雨ならぬ名の云々と啓したれば」にかけて解くべきかもしれない。」と記す。
- 11 注3、同。八八六〜八八七頁。
- 12 三田村雅子氏「枕草子 表現の論理」(有精堂、平成7年)二章4 「歌語りからの離陸—ウタの空洞化」2、一二二頁。
- 13 注12、同。
- 14 注3金子評釈に「雨ならば降りもすべきが、雨にもあらぬ無実の名の、世にいひ旧りたる事よと也。降り旧りをかけたなり」とある。
- 15 注4、同。一二二頁。
- 16 注4、同。一二〇頁。
- 17 『春曙抄』は末文の寸評について、能因本本文「さる君をおきた
- てまつりて遠くこそえいくまじけれ」に従って傍書に「此乳母の日向へゆくをあやしみとがめたる詞也」と記し、標注に「心みじかきめのとて見捨まるるにや」と難じていて、諸注釈書もこれにならうがごとくだが、三卷本系統本文「さる君を見置きたてまつりてこそ、え行くまじけれ」とともに、大輔命婦は下向を中止したようにも読める(夫であった佐伯公行のにも日向下行の記録もない)から、扇は清女が譲りうけたかも知れない。
- 18 集成説。ただし諸注釈書の賛同を得ている訳ではない。全注釈は「一仮定説にすぎない」とする。『大鏡』第四巻には、この一件をめぐる「長徳四年四月廿四日にこそはくだり給にしか、御とし廿三。いかばかりあはれにかなしかりしことぞ」の評がみえる。
- 19 渡瀬茂氏「き」と情動」(『国語と国文学』平成21年11月)には次のようにある。
- 過去の現象の結果が現在にも存在する場合に「り・たり」が用いられ、また過去の現象が現在にまで関わる場合には「けり」が用いられる。このような助動詞と並び用いられるのであるから、「き」が表現する過去は現在と時間的な隔たりが大きいのみならず、その対象が「いまここ」の時空とのあいだに変転を経た断絶の關係にあり、また喪失の表現であるというのは自然の勢いである。(…中略…)そして、この断絶・喪失は情動の表現となる。
- 20 『枕草子』の言述については、小著『言述論』or『説話集論』(笠間書院、平成15年)、小論「類聚と想起 『枕草子』の言述・統考」(浜口俊裕・古瀬雅義編『枕草子の新研究』新典社、平成18年、所

収)、参照。

21 片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典』(笠間書院)、久保田淳氏・馬場あき子氏編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店)、参照。

22 平成20年3月改訂「中学校学習指導要領」第2章第1節「国語」における「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1)、各学年「内容」。

23 ことわるまでもないことだが、稲賀先生にその視点がなかったというのではない。稲賀敬二コレクション6『日記文学と『枕草子』の探求』(笠間書院、平成20年2月)に寄せた小文(解説「稲賀敬二先生の声 複雑なものを複雑なままで受け取る能力、それをその実態のままに人に伝えようとする努力」)、参照。

24 「教えられるが教えていいのか」(『日本文学』平成11年4月)、「文学／教育のレッスン(1)」(『Problematique 1』平成12年7月)、『言述論 for 説話集論』附論(注20所収)、「古文学習論―読解力」育成に向けた5段階学習(1)、「中等教育における教科教育内容の開発とその指導」、広島大学大学院教育学研究科リサーチオフィス報告書、平成20年3月)、「同(2)」(『中等教育における教科教育内容に関する研究』、広島大学大学院教育学研究科リサーチオフィス報告書、平成21年3月)など。